

# パスカル氏の事件帖

パリ市の中心を東から西へと蛇行するセーヌ川うかぶふつの中の島。シテ島 Île de Cité とサン＝ルイ島 Île Saint-Louis。おおきいほうのシテ島には、ノートル＝ダム寺院があり、つねに観光客でにぎわっている。そのまえの道は、セーヌをわたってサン＝ジャック通り Rue Saint-Jacques につながる。この通りを 500 メートルばかりくだったところに、「ソルボンヌ」という通称で知られるパリ第 4 大学がある。

図書館での調べ物を終えた樹里は、サン＝ミッシェル大通り Boulevard Saint-Michel をわたり、ムッシュー＝ル＝フランス通り Rue Monsieur le Prince をめざしていた。この通りに最近ふえた日本料理屋で、なにか食べようとおもったのだ。尤も、日本料理屋といっても、大抵は中華系がオーナーの「パチ日本料理屋」である。

——ほんまにふえたなあ、日本料理屋……

サン＝ミッシェルとムッシュー＝ル＝フランスの合流地点で目にとびこんでくる「Restaurant Japonais ITADAKI Yakitori - Sashimi - Sushi」の看板を見やりながら、樹里はおもわずひとり言ちた。ちなみに、「焼鳥、刺身、寿司」は、この手の「日本料理店」の三種の神器である。

樹里がソルボンヌに留学しているのは、『星の王子さま』の作者アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ Antoine de Saint-Exupéry を研究テーマにしていたからだが、フランス語そのものにも興味があった。大学に入ってさいしょの授業のときに、とてもフランス語の教師には見えない教授が、教えてくれた。

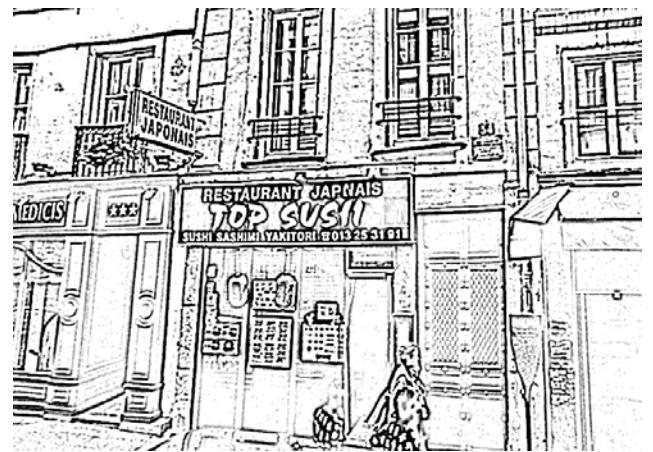
——フランス語は、古代ローマの言語であるラテン語の変化したもので、イタリア語、スペイン語、ルーマニア語などと姉妹言語にあたります。第一言語として話している人は約 7 千 5 百万人だが、第二言語としている人も含めると、約 2 億人の人々が使っております。フランス以外に、カナダ、ベルギー、スイスなどの公用語でもあり、国際フランス語圏機構には 56 カ国・地域と 14 カ国のオブザーバーが参加しており、スイスの言語学者ジョルジュ・ウェーバー

の計算によれば、世界有力言語トップ 10 で、英語に次ぐ第 2 位にランクしているのです……

そういつて、教授は嬉しそうに学生たちを見まわしたが、なにしろ入学したての学生たちは、樹里をはじめ、全員ポカンとした顔で見返すばかりだった。現代の国際社会や、歴史と文化におけるフランス語の重要性を理解したのは、もっと後になってからのことだ。そして、大学院に進んで、フランスに留学してみると、日本語と日本という国について、否が応でも考えさせられる日々を送ることになった。なるほど、ことばというメディアは奥が深い。

角をまがってムッシュー＝ル＝フランス通りにはいり、YOKORAMA という日本料理店をパスした樹里は、「Restaurant Japonais TOP SUSHI」のまえで足をとめた。看板にはやはり三種の神器の名が記されているが、順番は「Sushi - Sashimi - Yakitori」になっており、「寿司」と書かれた赤提灯が店頭にはぶらさげられている。寿司がメインなのかもしれない。

——はいつてみるか……



と、看板を見あげたまゝ思ったところへ、なにかにぶつかられてよろめいた。

—— パルドン Pardon ……

反射的に謝罪のことばを口にしつつ、下を見ると、古風な恰好をした男性が歩道に尻餅をついている。ズボンをはたきながら立ちあがった男は、ゆっくりとあたりを見まわし、樹里にむかって、こう尋ねた。

## パスカル氏の事件帖 (福島洋行)

——お嬢さん、しつれいだが、ここは中国かね？

——なんですって？

——中国人とお見受けしたが……

——わたしは日本人です

——あの赤いランタンに書かれているのは中国の文字であるろう？

——否、これは日本の漢字です

——じゃあ、ここは日本かね？

——パリよパリ、フランスの首都

ふたゝびあたりを見まわして、男は唸った。

——たしかに、パリだ……

——あなたこそ、だれよ？

臍全体でいぶかしさを表現する樹里に、男は、平然とこう答えた。

——わたしはブレイズ・パスカル、科学者にして文筆家だ

——ブレイズ・パスカル？!

パスカルって、あのパスカル？!

一瞬、「あのアライグマの？」とか「ベルばらの？」などと付け足して、ノリっこみに持ち込みたいという

関西人の血が騒いだが、狭い歩道のうえで突っ立っているふたりに好奇の視線をあびせつゝ、邪魔そうによけてゆく歩行者たちに気づいた樹里は、向かいの映画館「Les 3 Luxembourg」をしげしげと眺めている男の腕をつかむと早足で歩きだした。



☆

ブレイズ・パスカル Blaise Pascal は、1623年6月19日、中仏の古都クレルモン＝フェラン Clermont-Ferrand 生まれ。その後、一家でパリに移住した。当時のフランスでは、官位を金銭で購入する制度が流布しており、ブレイズの父親エチエンヌ・パスカルも、税務管理官の仕事を購入し、貴族に叙せられていた。所謂「法服貴族」である。この職を弟に売却して上京したのは、子女の教育とみずからの学問のためとされる。売却益はパリ市公債の購入にあて、しばらく利子生活者となったが、のちにルーアンの税徴収官に任命され、子供たちをつれてパリを離れることになる。

父エチエンヌは、当時の教養人として数学や音楽に関心をもっていたが、とりわけ数学には熱心であったらしい。このことが、ブレイズにおおきな影響をあたえたであろう

ことは、想像に難くない。父に連れられて学者たちのあつまる研究サロンに出入りしていたブレイズ少年は、弱冠16歳で「円錐曲線試論」を発表。この論文は、父エチエンヌの数学仲間を通じて、オランダ在住であったデカルトの手元にもとどいた。デカルトは、この「パスカル氏のご子息」の論文にたいし、微妙なコメントをのこしたという。

☆

樹里の記憶にのこる「パスカル」の内容は、おおむねそんなところだった。これでも、日本の大学で「フランス文学史」を受講していたのだが、なにぶん、3時限目の授業というのは、満腹感と、そしてその幸福感の齎す睡魔にダブルスコアで負けまくっていたのである。その他の知識といえば、気圧の単位に名前がのこっているとか、計算機を発明したということぐらいだ。もちろん、その17世紀人のパスカルが、どうして21世紀のパリに存在するのかわからない。

手近のカフェに飛び込むべきかと考えたが、そんなところでは、周囲からもじろじろ見られること必定だ。そういえば、たしかカフェがパリに登場したのは17世紀末のことだった。パスカルは、たぶんカフェを知らないにちがいない。とりあえず、サン＝ミッシェル大通りに出ることにする。

——お嬢さん……

——樹里よ

——Julie？ フランス人みたいな名前だ

——母親がフランス映画のファンだったのよ

——では、Julie がフランスにいるのも、お母上の影響だね？

——まあね……

じつは『ヘタリア』という漫画の「フランス兄ちゃん」が好きだったからフランス語の勉強に熱が入ったのだが、説明が面倒なので端折った。なにを隠そう、樹里は所謂「腐女子」であったので、その手のネタにも心が惹かれていたが、もちろんそんなことは暖気にもださない。だいたい、眼前の男がパスカルだと知ったとき、思わず27歳年長のデカルトとの攻め受けを考えてしまったほどである。咄嗟に思いついたのは、もちろん「パスカル×デカルト」だった。なにしろ、日本のアニメ、ゲーム、マンガの輸入にかけては欧州一を誇るフランスでは、漫画の仏訳版も大量に出版されているにもかゝらず、腐女子御用達の漫画の翻訳はまだまだ少なく、樹里は些か飢えてもいたのだ。

## パスカル氏の事件帖 (福島洋行)

そんな葛藤になぞ微塵も気づかぬパスカルは、満足げにこう云った。

——なにしろ、フランス語は、母親であるラテン語の後継者だからな

——どういうこと、それ？

——世界語ということに決まっているではないか

当時、フランスの威光は欧州全土を覆い、18世紀から第1次世界大戦まで、フランス語は事実上の外交言語になってゆく。

——残念ながら、200年語には英語にとってかわられるけどね

——なに、あんな発音のやゝこしい言語にか？

——日本じゃ、フランス語のほうがやゝこしいって、よく云われるわ。たしかに、英語の母音は13、子音は25で、計38、フランス語は、母音12、子音17、半母音3、鼻母音4で、計36なのにな

——日本人に、コルネイユさんやモリエール君の芝居を聞かせてあげたいものだ。あれは美しいぞ

——最近じゃ流行らないのよ、古典で

勿論、パスカルにとっては現代モノなのだが、それには気づかず、彼は、公園の外を指さすと、こう尋ねた。

——ところで、あそこを走っている馬車のようなものなんだね？

ヴォワチュール  
——クルマ **voiture** よ

ヴォワチュール  
——馬車だと？ 馬などおらぬが……

オートモビル  
——えーと、自動車 **automobile** っていって、油とかガスとかを燃やして、そのときの圧力を回転する力に変えてとかなんとかして動いてんじやなかったかなあ……

——ふむ、それは興味深い

1647年に、故郷の近くのピュイ・ド・ドーム山上でおこなった実験にはじまる圧力の研究が、まさかエンジンやブレーキに役立っているとは思ってもよらぬ17世紀人は、サン=ミシェル大通りを行き交う自動車をじっと眺めている。

——ときおり走っている、あの巨大なものオートモビルかね？

ビュス  
——あれはバス **bus** っていうやつで、決まった路線を走っていて、だれでも乗り降り自由なの

——すばらしい！ じつはわたしも、5ソル払えばだれでも乗れる馬車をつくらうとしていたのだが、すでに実現していたとは！

——いや、たぶん、パスカルさんののが先だと思うよ……

馬車を持たない一般庶民のためにパスカルが考案した史上初の乗り合いバス「5ソルの馬車」カロッセ ア サン **carrosses à cinq sols** は、1662年3月にパリ市内で運行を開始したものの、身分の低い者との同車を嫌がった勢力のおかげで労働者階級は乗れないことにされてしまい、けっきょく経営難で15年後に廃止されることになる。

——そういえば、今日は何日なのだろうか？

——2009年3月9日よ

——なんと！

——パスカルさんは、いつだと思ってたの？

——わたしの記憶では、1661年3月9日のはずだが

——日付はいつしよなんだ

——時間もわかるかね？

樹里は携帯をだして、時間を確かめる。

——午後1時10分

——困ったな、今日はホイヘンス君が訪ねてくることになっていたのだが……

クリスティアーン・ホイヘンス **Christiaan Huygens** (1629-1695) はオランダ人の科学者で、1655年に、高解像度望遠鏡をつかって土星の輪を発見したことで知られている。パスカルとは確率の研究をおこなっていた。記録によれば、1661年3月9日の午後、ホイヘンスはパスカルを訪ねたが、不在であったとされている。

一寸困った風のパスカルであったが、好奇心がただちに憂いを吹き飛ばしたらしい。興味津々の態で、樹里の携帯を眺めている。

——それはなんだね？

テレフォヌ・ポルターブル  
——携帯電話 **téléphone portable**、略してケータイってっても、わかんないか……

——時計にしては小さいな。ホイヘンス君の発明した振り子時計は、とてもじゃないが、そんなに小さくはできない

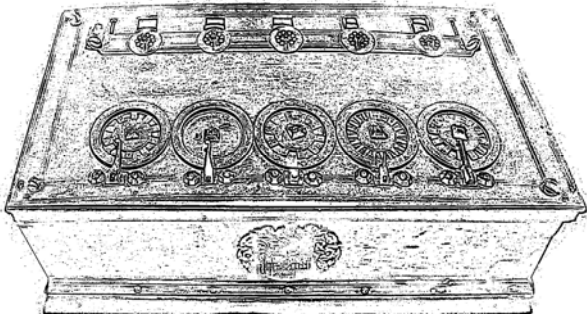
——基本的には、とおくはなれた人とお話しする機械ね。あと、手紙もやりとりできるし、一瞬で絵も描けるし、もちろん計算だって……

——なに、計算機でもあるのか？

——あ、そういえば、計算機って、パスカルさんが発明したんだっけ

——いや、発明したのは、チュービンゲン大学のシッカルトだよ。あの天文学者ケプラーの友人さ。わたしは、それを改良しただけだ

## パスカル氏の事件帖（福島洋行）



父親の税務の助けとすべく若きパスカルが設計した自動計算機は、歯車の回転で計算をおこなっており、  
ルー・ド・パスカル  
「パスカルの輪」roue de Pascal と呼ばれ、当時、大評判であった。徴税旅行にも持っていけるよう、強度にも注意が払われていたという。

樹里の携帯を借りて、<sup>た</sup> <sup>すが</sup> 矯めつ 眇めつしていたパスカルは、

——一寸、中を開けてみても良いかね？

と訊いた。

——ダメダメ、壊れちゃう

そう云われて、パスカルは甚だ残念そうに携帯を返すと、

——これは売っているのかね？

——でも、パスカルさん、お金、持ってへんやん

——家に戻れば少々は……

樹里は、ポケットから1ユーロ玉を取り出して、パスカルに見せた。

——これが、現代のお金なんだけど

——うーむ……

——あ、その服、もしかして高く売れるかも……

——なに、この服が？

パスカルの眼が輝く。そして、この服を売りに行った先で、ふたりは盗難事件に巻き込まれ、とんでもない5日間を過ごすはめになるのであった。

☆

——いや、愉快的な5日間であった

最初に出会ったムッシューニル＝フランス通りの日本料理店のまえで、パスカルは云った。珍しくあたりには通行人もおらず、ふたりは歩道のまんなかを占拠している。

——パスカルさんの呑気さには頭がさがるわ

——いや、頭は使うべきものだよ

——そりゃ、パスカルさんの推理はすごかったけど

——人間は葦のようにかよわい存在だが、考えることができるんだ。これは宇宙最強の能力だよ

——あ、それ、知ってる

——しかし、大層残念ではあるが、そろそろ戻らねばなるまい。ホイヘンス君が気を揉んでいるだろう

ホイヘンスは、3月12日にもパスカルを訪ねたが不在であったという記録を残している。

——未来というものは興味深いものだな

——そりゃそうでしょうよ

——時間はもちろん、空間旅行もすばらしいにちがいない。

樹里の国にも、ぜひ行ってみたいものだ

——そのかわり、あたしが帰国してからにしてね、案内してあげるんだから

——あゝ、そうしよう

じゃあ、とパスカルが差し出した右手を握るや、その手は掻き消え、その手の持ち主の姿もまた消えていた。周章てゝあたりを見まわすが、もちろんどこにも居ない。

——ちゃんともどれたのかな、元の時代に……

そう思いながら、例の「Restaurant Japonais TOP SUSHI」という看板を見やるとたん、樹里は、その斜め右上、「54」という番地表示の下にとめられている銘板ブラックに気づく。そこには、こう刻まれていた。

ICI  
DANS L'ANCIENNE RUE  
des FRANCS BOURGEOIS SAINT MICHEL  
de 1654 à 1662  
VECUT  
BLAISE PASCAL

「こゝ、旧フラン＝ブルジョワ＝サン＝ミシェル通りに、1654年から1662年まで、ブレーズ・パスカルが暮らした」  
——こゝ、パスカルさんの家だったんだ……

1662年8月19日午前1時、ブレーズ・パスカルは、パリ市内の姉の家で没する。享年39歳。亡骸は、ソルボンモンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴヌの背後にある聖女ジュヌヴィエーヴ山のサン＝テティエンヌ＝デュ＝モン Saint-Étienne-du-Mont 教会に埋葬された。晩年書きためていた「人間は、考える葦である」や「クレオパトラの鼻、それがもうすこし低かったら」などのことばで知られる『パンセ』*Pensées* が出版されるのは、8年後のことになる。

大学に戻ろうと歩きだしながら、樹里は、ふと『パンセ』の「人間は、天使でも獣でもない」ロム・ネ・カン・ロゾー L'homme n'est ni ange ni bête. という一節を口にしていた。

——だって、人間は人間だものね……

なんとなくそう呟いて前を見ると、パンテオンのドームの上に、真っ青な空が広がっていた。 (了)